

## 江戸の町と深川

江東区深川江戸資料館

## 1 山の手と下町

天正18年（1590）8月1日、徳川家康が関八州の領主として江戸へやってきてから、400年以上が過ぎました。江戸は幕府の本拠地として飛躍的な発展をとげました。

慶長8年（1603）、家康が征夷大將軍として江戸幕府を開くと、全国の大名を動員しての江戸建設工事が行われました。神田山（今の駿河台周辺）を切り崩して日比谷の入江を埋め立て、江戸城周辺には重臣や大名の上屋敷が設けられました。

また、上方などから商人や職人が江戸へと下ってきて業種別に職人町が作られるなど一定の計画のもとで町々が形成されていきました。

このようにして、武家地と町人地が区切られて設定されたのですが、武家地は本郷・小石川・市ヶ谷・四谷・牛込・青山・麻布といった地域が中心で、これは現在の千代田区西部から新宿区の東側、さらに港区・文京区周辺が含まれ、江戸城（現皇居）の北方から西方といった方面に当たります。

一方、町人は日本橋、京橋、神田、浅草といった江戸城の東部、現在の千代田区東南部から中央区、台東区周辺に集められました。

武家地は、地理的にも台地や高台の場所でありこれを「山の手」と呼びました。また、町人地の場合は地理的にも低地になり、これを「下町」と呼びました。こうして、「山の手と下町」という区分が江戸城を挟んで形成されたのです。

## 2 江戸の拡大と深川

しかし、明暦3年（1657）に江戸中を灰にした明暦の大火（振り袖火事）の後、幕府は抜本的な江戸の都市作りに乗り出しました。

それは、過密化した市街地を拡大し、新たな町

人地を設定し、旗本や御家人、さらに大名の下屋敷（蔵や別荘）などの武家地も新たに確保し、寺院や神社は江戸の外周部に移転させるというものでした。

そこで、当時「川向う」と呼ばれた隅田川以东の本所・深川の開発が行われ、やがて江戸中期には江戸の御府内に組み込まれていきました。

竪川・横十間川・大横川・仙台堀などの主要な運河の開削、整備はこの時期に行われました。

また、寛文元年（1661）に両国橋が、元禄6年（1693）には新大橋、さらに元禄11年（1698）には永代橋が完成し、江戸市中との距離が縮まりました。新大橋の建設・完成当時、深川に住んでいた松尾芭蕉は、

「初雪や かけかかりたる 橋の上」

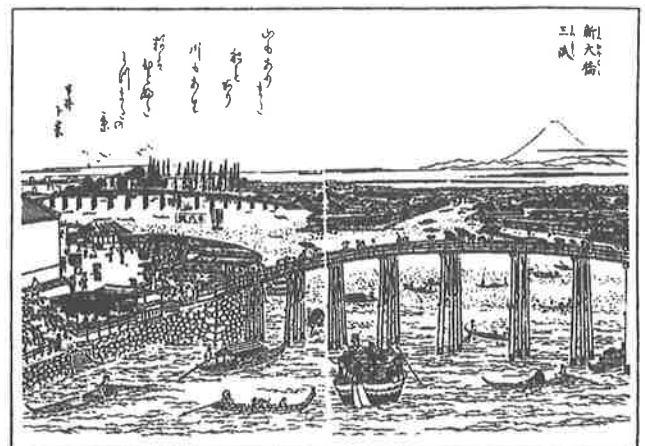
（建設時）

「ありがたや いただいて踏む 橋の霜」

（完成時）

の二句を詠んでいます。

こうして深川は江戸の新開地として本所と共に発展してゆくこととなったのです。



「新大橋・三派」(『江戸名所図会』)

### 3 江戸の庶民

元禄年間（1690頃）の江戸の人口は、武家が40万人、町方35万人、寺社5万人、合計で約80万人でした。当時ヨーロッパ第一の都市ロンドンの人口が50万人だったのですから、江戸は世界一の人口を誇っていたと考えてよいでしょう。

さらに、もう少し後の18世紀中頃には武家50万人、町方50万人となり、これだけですでに百万人を越えていたこととなります。では、町方の50万人はいったいどのようにして住んでいたのでしょうか。

江戸の面積の約7割は武家地で、そこに50万人の武家人口が住んでいたこととなります。大藩の武家屋敷や由緒もあり幕府や大名の保護を受けた寺院や神社ともなると広大な敷地を持っていました。これに対して町方はどうだったのでしょうか。

町方の面積は、江戸全体の約16%にあたる2百70万坪でした。2百70万坪は約9km<sup>2</sup>。つまり、3km四方の土地に50万の庶民が住んでいたこととなります。これは1kmあたりでは、6万人弱ということになり、たいへんな人口密度といえます。

そのため、表通りの一歩裏手には「裏長屋」と呼ばれる間口9尺（約2.7m）、奥行2間（約3.6m）を標準とする住まいが作られたのです。

そして、表通りに住み店を構えている人、つまり商店主や職人の親方などが「町人」として位置付けられ、町名主や町役人として町政に参加し、町の役や諸経費を負担していました。

それに比べて「裏長屋」に住む人は、役を負担する義務がない代わりに町の運営などについて発言することもできませんでした。生業は、天秤棒や屋台での行商や、職人の下職、通いの商人・職人などが多かったようです。

前者を「家持」（土地・家屋とも所有）、「<sup>じがり</sup>地借」（家屋のみを所有）と呼び、後者を「<sup>たながり</sup>店借」（長屋を店賃を払って借用）と呼んでいました。

またこのほか「<sup>やもり</sup>家守」といわれる人は、それぞれの長屋を地主（長屋の持ち主）に委託されて管理する立場の人で、いわゆる「<sup>おおや</sup>大家さん」にあたり、前者に含まれる人です。

### 4 深川の人々

江戸市内の町々の住民構成を幕府が調査したものに「町方書上」があります。文政11年（1828）の「町方書上」によると、資料館総合展示室のモデルとなった深川佐賀町は、

町内惣家数	三百拾貳軒（312軒）
家持	七人
家守	四拾七人（47人）
地借	八人
店借	貳百四拾九人（249人）
明店	拾四軒（14軒）

と記されています。史料上の合計数は一致しませんが、実際の住居者は3百11人で、このうち「店借」人の数は2百49人となり、その率80.1%となります。では、この数字を江戸の他の地域と比較して見ましょう。下の表は各地域の「店借」人の比率を表しています。深川は他の地域と比べても高い比率を示しています。

深川は豊富な水運を利用して問屋（材木・干鰯・米など）・倉庫業・運送業が発達し、さらに漁師町（隅田川沿岸）も含めた諸業に連なる仕事に従事する庶民が生活していたことがわかります。

地域名	居住戸数	店借戸数	店借比率%
芝	9,558	7,052	73.8
赤坂	2,281	1,586	69.5
外神田	3,393	2,281	67.2
本郷	4,072	2,718	66.8
下谷	6,494	4,769	73.4
本所	5,835	4,410	75.5
深川	11,508	9,488	82.5

松本一郎「幕末・維新时期における都市の構造」  
（「三井文庫論叢」第4号）より抜粋